

## 学界消息

### 本会記事

本会評議員京都大学文学部教授文学博士那波利貞先生は、去る八月一日付を以て停年退官された。大正四年京都大学文科大学を卒業後、第三高等学校を経て、昭和四年京都帝國大学文学部助教に任ぜられ、昭和十三年教授となり、二十五年の長きにわたつて東洋史学を講ぜられ、多数の学徒を育成せられた。この間、研究の面にもその深蘊を究められるとともに、とくに敦煌文書による唐代史研究は、先生の独断場ともいへべく、学界の進展に寄与せられるところもまた多大であつた。このたび先生の退官せられることは、まことにわれわれ後学の痛惜措く能わざるものがあるが、幸いに退官後も京都に止まられる由である。今後ともわれわれ後学の御指導と、本会への御援助を切望して止まぬ次第である。

### 京大国史関係

読史会見学旅行 六月二七日(土)―六月二

八日(日)

恒例の春季旅行が、いろいろの都合で遅れていたが、小葉田教授以下三三名、高野地方に向つた。第一日は、天王寺、紀伊中ノ島を經由して粉河寺に到り、粉河寺縁起や粉河寺文書を見学、夕刻高野山に登り蓮華定院に宿をとつた。第二日は、先登五来重氏の御案内をえて、奥院、金剛三昧院、不動堂、本堂、高野山大学図書館、靈宝窟光明院等を見学し、午后四時高野山発、午后九時京都に帰着解散した。

読史会例会 七月一日(土)

石田善人「時宗教団について」

竹田聰洲「日本當民の家と仏教との關係」

### 京大東洋史関係

東洋史談話会 例会 六月十一日(木) 午后

一時より、人文科学研究所書庫を見学。終了後人文科学研究所の諸先生と懇談会を持つた。参会者十七名。

例会 七月六日(月)

岩村 忍「元朝における属人法主義」

大学院懇親会、例会 六月十三日(土)

華学璋文「劉瑾について」

例会 七月十一日(土)

西村元祐「後漢帝國の性格」

人文科学研究所人文科学講座 於人文科学研究所分館

八月一日(土)

清水盛光「親の權威」

太田武男「裁判離婚の現段階」

八月二日(日)

日比野丈夫「幕末日本人の中国觀」

岩村 忍「西洋における中国觀の変遷」

八月三日(月)

樋口謹一「アメリカ初期における人種と人種問題」

田中 裕「近代への転換期における農民像」

八月四日(火)

牧田諦亮「北京の策彦和尙」

入矢義高「新中国における古典文学の

再評価

八月五日(水)

後藤 靖「明治思想史の特質」

河野健二「市民革命の思想」

京大西洋史関係

夏期休暇中のことと別に特記すべきこともないが、昨年より継続中の当研究室の総合研究「傭兵制度の歴史的研究」については次の諸氏により発表が行われ、その都度活潑な討論がもたれた。

山本幹雄「アメリカ革命とドイツ人傭兵」

兵

永井三明「フイレンツェ傭兵とマキアヴェルリ」

ヴェルリ

京大地理学関係

近郊山村調査 文部省科学研究費による、藤岡教授の近郊山村研究の第一次調査は、洛北花背及び久多をフィールドとして、西村助教授他数名の協力の下に、七月二十二、二十五日、八月二日、九月十日の三回に亘つて行われた。

人文地理学会第一回例会 七月四日 京大附

展覧會講演室

末尾至行「エネルギー資源の地理」

村松繁樹「万葉地理」

京大考古学関係

京都府竹野群網野町大字小浜、岡古墳発掘。

離湖の排水溝の改修工事中に昨秋砂丘より横穴式石室を発見す。京都府の依頼により六月十六日より二十三日まで発掘調査。本教室より樋口隆康・林巴奈夫の兩名が参加。

編 集 後 記

何はさておき、風水害にあわれた会員の皆様に、心から御見舞申し上げます。

先達て、中国の淮河の治水ダム建設工事の映画を見ましたが、数千年にわたつて中国の民衆をくるしめた過去の淮河を想うとき、結集された人間の力の偉大さを感じました。そして荒廃に委ねられている祖国の現状を思うとき、じつとしておれぬ気持になります。日本人の力は、祖国を荒廃から救うことはできないのか。いやできる。団結すればできない

ことはないと考えます。歴史は、やはりこういつた各民族のたたかひのあとを示してくれ

ます。それにしても「史林」は、そのような皆様

のたたかひを、しっかりと支えているでしょうか。皆様の生活・要求にびつたりと結合しているでしょうか。「史林」は、いま隔月刊の準備をすすめています。それとともに、内容をよくしてゆくことに最大の努力をつづけて行き度いと思ひます。きつと不満が多いことと思ひますが、それはどしどし私達編集委員に御聞かせ下さい。それによつてこそ、「史林」は、会員・歴史家相互の間を結合し、何物にも勝る屈しない、独自のものとして、皆様の要求に應へることのできるものに、自己変革をとけてゆけると思ひます。

いま祖国が、戦争という未曾有の危機に直面していることは改めていうまでもないと思ひます。そのような危機を担ふことのできる歴史学とは、一体どんなものか、じつくり考えなおして見る必要があるのではないでしようか。それを抜きにして、自己変革はありえないと思ひます。どうでしようか。(池田)